

# 平成26年度教師海外研修(ラオス) 研修報告書

学校名	愛知県立常滑高等学校	氏名	榊原 麻起子
-----	------------	----	--------

## 1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

### (特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

本当に学び多き 10 日間でした。自分の中で、特に研修の目的としていたのは、①ラオスを五感で感じ、持ち帰ること、②ラオスを自分の目で見て、ラオスで経験したことを今後の教育活動に生かすこと、③この研修を通して、仲間を作ることの3つでした。①に関しては、十二分に満喫しました！ラオ語の響きはやわらかでどこことなく可愛らしい！そこら中で見た果物などの食材はとても色鮮やかでした。食事はどこでもおいしくて... 皆さんに伝えたいことがたくさんできました。②に関してはいろいろな視点で考えさせられることが多くありましたが、特に強く感じたことは教育の重要性。ラオスでは学校や教材、教員が不足、基礎教育もままならない人も多くいます。しかし、子どもたちは学びたいという意欲はとても高く、私たちが教えた日本の歌や文化など、きらっきらの目で一生懸命取り組んでくれました。忘れかけていた教師になった原点を思い起こさせてくれるような出会いがありました。③に関しては、旅で出会ったラオスの人々はもちろんのこと、研修を共にした素晴らしい仲間たちに巡り会うことができました。彼らに支えられて、より深い学びをすることができました。教師としてだけでなく、一個人としても考えさせられることが多い旅でした。この研修で得たものをどのように生徒たちに還元していくか - 今後の大きな宿題であり、研修はここからが本番という感じです。

## 2. 訪問国から学んだこと(気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

### (1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

2年前に英語の授業でラオスに関する英文を扱ってから、私の中ではラオスはとても気になる国でした。いろいろなところで話を聞くたびに、どの人も“いいところだよ!”と話してくれて、ラオスという国に非常に興味を持つようになりました。“近い将来是非自分の目で見て来たい”という気持ちを強く持っていました。今回その夢が叶いました。私が思い描いていた通り、ラオスという国はとても穏やかで訪れる人を癒してくれる魅力をたくさん持っています。緑多き山々、ゆったりとしたメコン川の流れ、田畑を耕し作物を育て、自然と共に生き、信仰心を持って暮らしている... どこに行っても“人の優しさ”を強く感じました。ラオスの人々は控えめではあるが、とても優しい笑顔で接してくれました。年長者を敬い、家族や親戚、周りの人々との絆を大切にしながら毎日を過ごしているという印象を受けました。今回の研修旅行で、ラオスという国が大好きになりました。

### (2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

ラオスに到着して空港から出てすぐに、日本とラオスの友好関係を示す碑をあちらこちらで見つけました。青年海外協力隊が最初に派遣されたのもラオスだとお聞きし、日本とラオスの関係はこれまでも長い歴史があ

るのだと驚くと同時に、今後もより良い関係を続けて行けるといいなと思いました。日本とラオスには共通点がたくさんあると思いますが、その中でも重要なことはどちらも仏教国であるということ。ラオスの人々の生活にはその教えが根底にあり、彼らの生き方・考え方に大きな影響を与えていると思います。また、それが人と人との連帯を生み出しているように思われます。家族の絆、コミュニティのつながりの強さなど、昔の日本人は持っていたはずだと思いますが、私たちは物質的な豊かさと引き換えに、そういった精神的な豊かさを失って来たのではないのでしょうか。ラオスから学ぶべきことは多くあると思いました。

### **(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から**

いろいろな訪問先でお話を聞いたり、取り組みを見せていただく中で、世界はつながっていて、私たちはこの地球を共有しているのだと感じることが多くありました。ラオスは現在、経済成長も目覚ましく、急速に発展しており、まるでそれは日本の戦後のような状態だと思います。ラオスが抱えている課題（不発弾、環境、教育、福祉など）はラオスだけのものではなく、どうしたら持続可能な社会を目指すことができるか、同じ地球に住む仲間として、私たちも一緒に考えて行かなければならないのだと感じました。また、ラオスのためにがんばっている日本人の姿も多く見ることができました。日本のやり方を押し付けるのではなく、何がラオスの人々のために必要か、一緒に考えて、ラオスの人々に寄り添った支援のし方で共にがんばっている姿はとても印象的でした。彼女たちの努力を通して、自分たちにできることは何かということを生徒たちとともに、考えて行かなければならないと思いました。

## **3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」**

JICAのいろいろなプロジェクトや協力事業が、日本側からの一方的な押しつけではなく、この国の人々に寄り添って、人々が必要とするものや知識を支援が終わったあとも、自分たちで継続して利用できるような形で提供されていると、行った先々の訪問地で感じました。日本らしい支援のあり方はとても素晴らしいと思います。そして、この教師海外研修というプロジェクトも、私たち参加者がいろいろな視点から考えられるように様々な訪問地を用意して下さって、事前にいろいろと準備していただいたおかげで、私たちはそれぞれの場所を効率よく訪問し、いろいろなことを学び、考えることができました。同じ研修に参加した仲間とも多くを学びあうことができました。異校種、異教科であったため、それぞれの立場の違いや視点の違いを感じることもより多く、それが余計に刺激的な研修になったのではないかと思います。と同時に同じ教科であったり、似通った興味関心のある人向けの研修もより深く学べる場合もあると思うので、そういう研修・講演などがあつたら、面白いのではないかと思います。

## **4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」**

### **② 香川らしい国際協力量ちわ産業振興支援プログラム／ホアイホン職業訓練センター**

香川県・FUNFAN 実行委員会・JICA 四国の連携で3年間の草の根技術協力事業として実施されているプログラムの見学にホアイホン職業訓練センターを訪問しました。このプログラムが始まった理由は、①竹の扱

いに慣れているビエンチャン県バンビエン郡の人々がうちわを新たな製品として生産することによって、所得向上・生活安定化につながるようにすること、②丸亀うちわという日本の伝統工芸品がラオスで継承され、世界にその知名度が普及することの二つからだそうです。私たちは、まずうちわ作りを体験し、うちわののりが乾くのを待つ間にストールの染め物にも挑戦しました。たくさんのラオス人の女性たちが技術を得るために縫製や染色、織物などに取り組んでいました。その中で日本から染色を学びに来ていた女性も．．．。ラオスの伝統と日本の伝統がこういう形でも融合し、継承されて行くように思えました。ラオス語で“ファン”は「夢」という意味のようです。このプログラムが彼女たちの夢を叶えるのにも役立つといいなと感じました。（榊原麻起子）

### ⑪ 青年海外協力隊との懇親会

JOCV 4人の素敵な女性4人とサヤブリーの川沿いの素敵なレストランでラオス料理をいただきました。最初に私たちのリクエスト(?)に答えて、コオロギなど虫の唐揚げをお土産に持って来て下さり、恐る恐る食べてみるも意外にもとてもおいしいおつまみだということが判明！何でも見た目だけで判断してはいけません。田口さん、福島さん、中山さん、本間さんの4人はみんなとてもチャーミングな女性でしたが、中身は、異国ラオスで毎日慣れない言葉や習慣に奮闘しながら、と～っても熱い意志を持って自分の目標に向かって一歩一歩着実に歩いている、非常にたくましい強い女性たちでした。ラオスの人たちに寄り添い、彼らにとってどういう支援がベターなのかを考えながら、ラオスのために活動している姿はとてもまぶしく見えました。と同時に国際協力のためにこんなにも一生懸命がんばっている日本人がたくさんいるということをととても頼もしく思いました。（榊原麻起子）

### ⑭ メコン川クルーズ

メコン川のゆったりとした流れを感じて、両岸に見える緑濃い山々をのんびり眺め、釣りをしたり、投網漁をしたり、象やヤギがいたり、子どもたちが半裸（時に全裸）で水遊びしていたり．．．というラオスの人々の生活を横目で見ながら、ゆったりとした時間を過ごせた船旅でした。ここで一番印象に残っているのはドンニという9歳の少年との出会いです。彼は船長のお父さん、船の中でお茶を出したりしてくれるお母さんと一緒に船の仕事を手伝っています。シャイな笑顔で“サバイディー”と迎えてくれ、私たちのそばを通るときには少し腰を屈めて、お茶を運んでくれました。船に乗ってお手伝いをしながら、1日両親のそばで過ごす。お仕事が終わって眠くなったらお母さんの足下で昼寝。私たちからの質問に少しはにかみながらも、嫌な顔をせず答えてくれた釣り好きなドンニ。3人とも控えめでとっても優しい笑顔。メコン川の流れに彼らの穏やかさが重なり、とても素敵な家族の形を見せてもらいました。（榊原麻起子）

### ⑯ ルアンプラバンの市場（LPPEに関連して訪問した市場、ナイトマーケットなど）

ルアンプラバンの地元の市場では、いろいろな生鮮食料品が所狭しと、かごに入っていたり、山に積まれて売られていました。五感の中でも視覚と嗅覚をフル回転。（味覚も活用したかったなあ。ちょっと勇気がいりそうですが．．．）色とりどりの見たことのないような果物や野菜が色鮮やかに並べられ、また魚や肉もかな

り原型をとどめた形で切り売りされていました。“この暑さなのに冷蔵してないけど、大丈夫？”という考えが頭をかすめました。ラオスの人々のたくましさそんな物は吹き飛び、現地の人々の生活を垣間見ることができました。

ナイトマーケットでは、日没後メイン通りが歩行者天国になり、民芸品やアクセサリ、衣類その他もろもろの商品がとてもお値打ちに売られています。子どものかわいい売り子さんと値段を交渉しながら、お土産を大量購入。“安い！”というのはわかるのですが、ゼロの多いラオス Kip のせいで、いくらで買ったか、ちつとも頭に残りませんでした（笑）。（榊原麻起子）

## ⑳ 障害者雇用クッキー販売所／アジアの障害者活動を支援する会

ラオスでは障害者に対する福祉はまさに“発展途上”の状態、今までは障害者に対する支援の制度がきちんと確立されておらず、障害のある人はなるべく家から外に出ず、家の中でひっそりと暮らすということが“当たり前”だったようです。「アジアの障害者活動を支援する会（ADDP）」は、障害者自身が自立し、社会参加することができるように支援をしています。お話を聞く中で、いろいろな方がADDPのサポートを受けて、自立への道を着実に歩いていると言うことがわかりました。また、クッキーを作っているところを見学し、皆さんの作ったクッキーを試食させてもらいました。とてもおいしかったです。インタビューをさせていただく中で、働く喜び、仕事へのやり甲斐、仲間とのつながり、自分の未来への希望を語ってくれました。皆さんの明るい笑顔がとても印象的でした。支援をしている日本人（技術指導をしている美容師やレシピを提供しているパティシエの方など）にとっても、ラオスの障害を持つ人たちと一緒に“未来”をつくる支援活動であると感じました。（榊原麻起子）

## ● その他印象に残ったエピソード

### （外国語学習（ラオ語）と共通語としての英語と Non Verbal Communication）

『指差しラオス語会話帳』と『ゼロから話せるラオス語』の2冊を購入し、“少しでも言葉を勉強して行こう”と張り切っていたのですが、なかなか実行に移せず CD を聞いて勉強し始めたのは出発の2、3日前でした。通訳のポーカイさんとガイドのトンワンさんの助けで、言いたいことだけでも簡単なフレーズを覚えようと思ったのですが、例えば“いくつですか？”と聞くことができて、答えがわからない。読めない文字はただの記号にしか見えず、文字と音が合わさらないと頭には残らない。ましてやこの年取った脳みそにはなかなか入ってこない。でも、何度も使った言葉は頭に残りました。やはり、学んだことを実際に使って、身につけて行くということが重要なのだと再認識しました。そして英語教師として痛感したのは、やはりコミュニケーションのツールとしての英語の重要性。思った以上に英語が話せる人が少なく、言葉が通じないということはこれほどどかしいものかということを感じました。もし、コミュニケーションの手段があれば、もっとお互いの言いたいことがうまく伝えられたのに・・・と思わずにはいられませんでした。それと同時に、矛盾しているようですが、言葉がなくても伝わるものもあるということも実感しました。子どもたちと交流したときに、私ば“頭・肩・ひざ・ぼん”で簡単な日本語を教えるのと、一緒にドラえもん絵描き歌でドラえもんを描いたのですが、お別れするとき一緒に活動した子がさっと寄って来てくれて、名残惜しそうな顔で私の腕にミ

サンガ(?)をつけてくれました。(evil spirit を追い払い、これからの幸せを祈るおまじないのようなものらしいです。)言葉はあまり交わすことはできませんでしたが、何が言いたいのか、目と目で気持ちが通った瞬間でした。でも、今度訪れるときまでには、もう少しラオ語がわかるようになりたいです。(榎原麻起子)

## 5. 印象に残る写真2点 とその解説

●写真1…ファイル名 [BAN\_1514]

◇キャプション：“あたま・かた・ひざ・ぼん！”

◇解説文：

ケオクの子どもたちにプチ日本語レッスン!“あたま・かた・ひざ・ぼん!”と手遊びしながら、みんな楽しんでくれました。終わってからも、復習してくれてるのを見て、教師冥利に尽きました。



●写真2…ファイル名 [SKB\_0494]

◇キャプション：ルアンプラバンに咲いていた花

◇解説文：

熱帯の湿気の多さが植物に優しいのか、日本では温室で見るような植物、花屋さんでしか見たことのないような植物がたくましく自生しているのをよく見かけました。自然豊かなラオスの植物・動物にも興味津々。



## 6. 来年度参加する先生へのアドバイス(持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など)

- ・昨年度の参加者からのアドバイスを見て、蚊対策として、ジェルとか、スプレータイプとかシート式のものとか、いろいろ準備しましたが、それほど気を遣う必要はありませんでした。私は日本の方がずっと蚊に刺されます。虫除け対策は必要ですが、それほどたくさんなくても大丈夫かなと個人的には思いました。
- ・会計係は二人で、いつもいっしょにお会計をしたり、お金を計算したりした方がいいと思います。桁が多くてわかりにくい! レストランでは、ガイドさんにお任せで適当におすすめの物を頼んでもらいましたが、それはその方がはずれがなくていいのですが、量に関しては、けっこう多くて残してしまうことがあったので、何日か様子を見て、頼む量を少し調節してもいいかなと思いました。
- ・今回は、アルコールを飲まない人にはだいたいビール代を一人当たりで計算し、その分を返金していました。その方が、お互い気分がいいと思うので、何らかの方法で考えた方がいいかなと思います。
- ・アンケートやインタビューなど、どのタイミングでチャンスが訪れるかわからないので、若干荷物にはなるけれど、いつも持ち歩いていた方がいいと思います。

## 7. その他全般を通じての感想・意見など

普通の観光旅行では体験できないようなことをたくさん見聞きすることができました。この機会をいただ

くことができ、本当に感謝しています。改めて、日本はいろいろな支援をしているのだと思いました。今までは、発展途上国にどうして支援が必要なのかなとあまりよくわかりませんでした。この研修を通して、少し理解することができたように感じます。先日、自分の学校の ALT の先生に“JICA の研修旅行に参加して、いろいろな支援の現場を見学して来た”と伝えたところ、彼女（フィリピン出身）は“日本はいろいろと国際協力してくれてるからね！”と言われて、他国の人たちからもそういう認識で見られているというのがわかって、日本人としてとてもうれしく思いました。自分にできることは小さいかもしれませんが、そういう視点を持って、これからは教師を続けて行けるということを励みにしてがんばりたいと思っています。私たち教師の使命は、まずは自分が担当した生徒自身が国際協力について考えることができるような素地を作ることだと思います。そのための第一歩として、この研修は自分にとってはとても有意義でした。ありがとうございました。

以上